

こまざわ 経済通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1-23-1

卒業おめでとう！同窓会に入会しよう！



経済学部同窓会会長 大場 やすのぶ

ご卒業おめでとうございます。これまで皆さんは大学で多くの友人を得、そして講義やゼミを通して様々な人生訓を得たことと思います。先人の言葉には人生を考えるうえで、参考になるものが多いものです。そしてそれはその時々自分の進む道に通じるものです。

ところで、ソチでの冬季オリンピックで、スキージャンプの41歳の葛西選手がメダルを手にしました。彼は辛かったけれど努力し、競技を続けた価値を振り返っていました。その話を伺ったときに私は自分の座右の銘を思い起こしたのです。

それは中国宋代の文人陶淵明の詩「移居」の中にある「力耕不吾欺」という言葉です。

力をこめて田畑を耕せば、決して自分を欺かない、一所懸命仕事をしていれば、必ず報いてくれるもの、という意味です。だから仕事をするなら心をこめてやろう、ということです。同じ、やるなら夢を持ち、日々精進したいものです。

ジャンプの葛西選手もメダルという夢を持って努力を続けたのだと思います。

いつの日か、皆さんも人生訓を語る立場になると思います。そのときに、自分の夢に向かって努力したという自負を語るができるよう期待しています。

この点から同窓会について少し紹介したいと思います。今申し上げたような夢、その夢を共に語り、後輩たちに夢を語る場を残していくこと、それが同窓会の役目のひとつです。皆さんには同窓会に入り、共に夢を語るとともに、後輩たちを支え、大学の発展に寄与していただきたいと願います。

経済学部同窓会事務局からのお知らせ

1. 同窓会組織の強化にご協力ください。

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたらご紹介ください。同封の「新入会員紹介書」にご記入のうえ事務局にお送りください。紹介いただいた未加入の方に、事務局から入会案内をお送りします。

2. 「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実のため卒業生の原稿を募集しております。積極的なご投稿をお願い致します。

- ・ 論題：自由
- ・ 字数：800字以内
- ・ 送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局

* なお、原稿の採否は事務局にご一任ください。

経済学部同窓会事務局 〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1



研究室訪問シリーズ



江口 允 崇 (専任講師、財政学担当、2013年就任)



今年度より駒澤大学経済学部経済学科に専任講師として赴任しました、江口允崇と申します。私の専門分野はマクロ経済学と財政学で、本学では主に財政学の方を担当しております。財政学とは、政府の活動を経済分析する学問で、政府の活動が経済にどのような影響を与えるのか、そして政府はどのように行動するべきなのかを考えます。我々個人と国家の関わりを考える学問とも言えるでしょう。

現在、日本の政府債務残高はGDP比で200%を超える危機的な水準に上り、消費税増税をはじめとした財政再建の取り組みが急務になっています。一方で、最近アベノミクスの効果もあってか景気も回復傾向にありますが、4月からの消費税増税によって再び景気後退を招く恐れもあり、予断は許されない状況にあります。欧米など諸外国でも、この景気後退と債務危機の2つの問題に頭を悩ませており、財政再建を行うのか、それともさらなる景気対策を行うのか、財政運営の岐路に立たされています。この景気後退と債務危機の2つの問題を抱える日本及び世界経済において、今後どのような財政運営が望ましいのかを考えるため、様々な政策が日本経済にもたらす影響を小難しい数学や統計学をこねくり回しながらシミュレーションしたりしています。

研究者としてはそうした自分でも難し過ぎると思うような分野を専門にしているのですが、学部のゼミでそれをやるわけにはいかないなので、色々手探りでやっています。今年度は差し当たり経済政策の本を輪読することにしたのですが、まず基礎が重要だということを痛感したので、来年度はマクロ経済学の勉強をしつつ、その成果としてマクロ経済学のテキストをゼミで出版するという計画を立てています。

ゼミの雰囲気としては、学生と比較的年齢が近いおかげか、良く言えば仲良くやっていて、悪く言えば舐められています。とはいえ、駒澤大学の学生は本当に素直で優しい子が多いので、毎日が楽しいです。夏にはゼミ合宿で沖縄に行ったり、秋にはゼミ生の実家のある山梨の温泉に行ったりと、非常に充実した日々を過ごさせて頂いております。その噂もあってか、来年度の入ゼミ試験には70人以上もの応募がありました。が、どうやら勉強しなくても良いという評判から集まった感があるので、来年度からはもっと勉強面も厳しくしてそうした印象を払拭していこうと思っています。



卒業生シリーズ

矢吹敏雄名誉教授の思い出

小谷野 浩治

昭和41年4月の入学式、矢吹先生の挨拶は、声が大きく何があっても動じない迫力があり私は圧倒されました。「学生時代に1,000人の友を作りなさい。卒業して社会に出たら、どんな事業でも成功します。」

3～4年生のとき、全学連がバリケードをあちらこちらに設置し授業は休講が続きました。しかし、私は学友会の委員長をしていたこともあり、一日も休まず学校へ通いました。希望を実現することも大事だが、やはり学校は勉強をするところ。学園紛争を体験して痛感しました。そこで、この状況を一日も早く解消して授業を再開しようと、学友会事務所で役員と語り合いました。私は、機動隊を入れて状況が落ち着くことにより、授業が再開すると考えたのです。全学連会長に会いその旨を直談判することを教務部に伝えました。止められて、残念ながら、それを果たすことは出来ませんでした。結局、卒業式も入学式に使用した講堂ではなく、学生会館の2階で行われました。

在学中、矢吹先生がご尽力された地下鉄駒沢大学駅開設のため、私は東京地方裁判所で学生代表として、学校の近くに駅を設置することが必要である旨の証人として立会い、意見を述べました。駒沢大学駅開設は見事に実現し、商店街の方々と一緒に東急電鉄までパレードしました。私は学友会の委員長やこのような社会活動を通じてたくさんの友を作りました。

矢吹先生は卒業式の挨拶で、「大学は卒業生に講義をすることができなかったので、勉強に来られる方のために、卒業後も大学はいつでも門を開けています」と言われました。卒業後、ロックアウト解除後、私は大学に3年間通いつめ、矢吹先生の講義を聞き、勉強した事を覚えています。

(昭和46年3月卒業 東都設計代表取締役 一級建築士)



ゼ

ミ

紹

介

姉 齒 ゼ ミ

経済学科3年 齊藤 宏明 (ゼミ長)

姉齒ゼミでは、ゼミ生が研究テーマを決めます。今年は「沖縄問題」を中心に学習していきました。

毎週のゼミでは、1～2人が発表を行い、討論を続けます。ゼミ生の義務は「発表の準備と毎回の発言」です。準備のためには膨大な本や資料を読まなければならないため、ゼミ以外での学習時間は非常に長くなります。用意することが多ければ、ゼミの時間にやりたい事も多くなり、ゼミの時間も長くなっていきます。長い時には1回のゼミが7時間も続いたときがありました。

また、姉齒ゼミは他ゼミに比べて圧倒的に人数が少ないという点も特徴です。そのため、先生との距離が近く、勉強していないと必ず分かってしまいます。その代わりに、勉強をしっかりとしていれば先生は真剣に指導してくれます。また、先生は一人ひとりもしっかりと把握しているの、個別の相談にも真摯に対応してくれます。

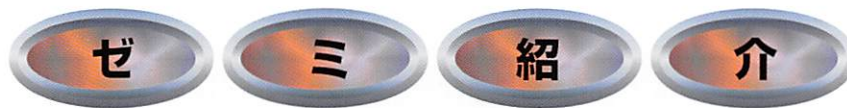
日々の学習の他に、春合宿という勉強だけに集中する合宿、夏合宿というフィールドワークに特化した合宿が準備されています。今年の夏合宿では沖縄に行き、5日間にわたって調査や見学をしました。真夏の沖縄で、自分たちの足でインタビューしてまわりました。夜は全員で1日のまとめを行い、疲れているはずなのに議論が白熱しすぎて、気がつくとき深夜2時になってしまったこともあり（次の日は6時起き！）。かなりハードな5日間で、最終日は全員へとへとでしたが、そこから得たものはそのまま全員が挑戦することになる論文に活かされました。

姉齒ゼミは、毎週の学習も合宿も、すべてにわたって手を抜かず必死に取り組まなければなりません。その代わりに得るものも大きく、わずか1年で2～3万字の論文を書き上げました。いつの間にか、そのための資料集めも苦にならなくなり、国会図書館に向くのも当たり前になるようになり、そして大量の本を読む集中力も身に付いている自分たちに驚いています。

姉齒 暁 (教授、消費経済論担当、2007年就任)



埋め立て工事反対運動が続く沖縄の泡瀬干潟にて



吉田敬一ゼミ

現代応用経済学科 3年 安藤 美和

吉田先生が在外研究から復帰の年だったので正規のゼミ募集は行なわれず、私たち3年ゼミは6名しか在籍していません（4年ゼミは14人です）。そして、他のゼミには存在するゼミ長もいません。そんな私たちがどのようなゼミ活動をしているのか…？

主なゼミ活動は、テキストを通して各々がレジュメ作成し発表することです。レジュメを作る際に苦労したことが多々ありました。例えば、自分の担当するテキスト範囲が広くてもレジュメにまとめるのは2枚以内といった規定があることから、重要ポイントを絞ること、少人数のため発表する番が早いことなどがありました。レジュメ作成で気を付けていたことは文字を主とした読むレジュメを作成するのではなく、図形や表式、フォントサイズを利用し、見るといったレジュメを作るよう心がけました。この作業を繰り返すことによりただ聞くだけの授業とは違い内容理解が深まり、まとめる能力の向上、発言する力が身に付き社会にでてからも役立つ能力がこの2年間で得られました。

課外活動としては、ゼミ呑み、夏のゼミ合宿（学年別）、ゼミ終了後の情報交換などを行っています。まず、ゼミ呑みですが、ここでは授業とは関係のないプライベートな話から、教授との意見交換の場となっています。そのため、普段教授に言えないことや聞けない事などのやり取りができるため終始賑やかなやり取りをしています。中でも、教授とのディベートをすることが私は好きです。夏のゼミ合宿では、勉強もほどほどにしますが、みんなで買い出しにいたり、BBQをしたり、夜中までお酒を呑みながら遊んだり、山に登ったりと旅行感覚で楽しみました。

そして、ゼミの授業終了後の情報交換ですが、この時間はゼミ2年目から自然に始まり各々が自分の現状や今後のこと、学校に関することからプライベートのことなど広範囲にわたって情報交換しています。これによって、ゼミ1年目では全く考えられないくらいゼミ生一人ひとりとの交流がはかれ理解することができる時間になりました。

このように私たちのゼミでは勉強と同じくらい、楽しい時間が多いゼミとして日々活動しています。

吉田敬一（教授、中小企業論担当、2002年就任）



2013年3年ゼミ夏合宿・筑波山

「キャンパス再訪」 禅文化歴史博物館

旧図書館（耕雲館）は1925年（大正14年）関東大震災復興と大学昇格を記念してつくられた90年の歴史をもつ由緒ある建物で、平成11年に東京都選定歴史的建造物に指定されました。開校120周年記念事業の一環として平成14年「禅文化歴史博物館」となり、現在は展示や博物館講座の実習に使われています。

設計者の諏訪栄蔵（1892～1967年）は、旧帝国ホテル本館の設計者であるアメリカのフランク・ロイド・ライトの影響を受けた建築家であり、名物ビアホールの「銀座ライオン」や旧「新橋演舞場」もその作品です。

大正モダンの雰囲気が漂う館内、中央ホール丸天井のステンドグラスから射すやわらかい光に、学生時代の思い出がよみがえります。キャンパス散策の際には、ぜひお立寄りください。

【開館時間】月～金 10:00～16:30 入館無料

【休館日】土・日・祝日・大学の休業日

*催物等の詳細は大学ホームページをご覧ください。



旧図書館外観



旧図書館閲覧室（昭和30～40年代）



禅文化歴史博物館（現在）



展示室（現在）

経済学部ソフトボール大会

2013年10月30日(水) 玉川キャンパスにて、経済学部と経済学部同窓会主催の第23回駒澤大学経済学部ソフトボール大会が開催されました。昨年までは開校記念日(10月15日)に開催されておりましたが、行事日程表の関係で本年度から日程が変更されることになりました。

大会当日は天候に恵まれ24チーム(23のゼミチームと教員チーム)が切磋琢磨し合い、交流を深めました。結果は百田ゼミが優勝、長山ゼミが準優勝、吉田ゼミ・村松ゼミが3位、館ゼミが敢闘賞に輝きました。



2013年度経済学部奨学論文審査結果のお知らせ

経済学部設立60周年記念事業より開始された経済学部奨学論文制度も本年度で5年目を迎えました。

本年度は32編の応募論文があり、厳正な審査の結果、下記の通り、入選2編、佳作9編となりました。残念ながら、特選の該当論文はありませんでした。

経済学部の学生がどのような問題に関心をもっているのか、その一端を窺うことができます。

論文講評は審査委員会が執筆したものです。

1. 入選は以下の2編の論文 (順不同)

①玉村契悟 (経4) ・猪瀬貴之 (経4) ・神田拓人 (経4) ・長谷健太郎 (商4)

「第二創業を生み出す都市型産業集積—大田区下町ボブスレーにみる実践学習—」

<論文講評概要>

本論文は、日本経済のグローバル化に伴う産業空洞化問題の克服の展望を日本有数の中小企業集積地である東京都大田区に焦点を当て、85年G5以降の円高・海外展開による集積の綻びを丹念に調査し、新たな展開方向を、大企業のサポーティング・インダストリー地域から地域中核企業が軸となり大田ブランドで製品を開発していく自律型産業集積の可能性に求めたものである。雇用の7割以上を支える中小企業の新たな活路打開の展望は日本経済再生の焦眉の課題でもあり、その問題意識は主体的であり優れたものであると評価できる。

②松村洋佑 (現4)

「租税回避行為における法的解釈と適用」

<論文講評概要>

本論文は、租税回避行為について、とりわけ裁判上での当該行為の解釈に当たり、租税に関する根本的な思考方式である租税法律主義と租税公平主義という二大原則の適用という観点から考察したものである。租税回避行為に関する研究業績は多数あるが、当該行為は今日においても多数見られる極めて現代的な課題でもある。本論文は、専門用語の的確な概念整理と先行研究に対する丹念な吟味を踏まえながら、現代的課題でもある租税回避行為を租税二大原則に沿って詳細に検討した意欲的な論文であると評価できる。

2. 佳作は以下の9編の論文 (順不同)

①間下香 (現4) 「企業博物館の社会的意義」

②小川貴大 (経4) 「スウェーデン・モデルの強さとは何か」

③相田雄貴 (現3) ・杉村あかね (商3) ・浜田大豊 (商3) ・浅野愛 (経3)

「大都市型地場産業の革新モデル—台東区におけるモノづくり・デザインの融合と事業継承の学習コミュニティ—」

④野口啓太郎 (商4) 「東京における地方銀行の存在意義とは何なのか?—東京都民銀行のリレーションシップバンキングを事例として—」

⑤野島涼 (経4) 「限界に達した日本型生活保障と迫られる改革」

⑥木下裕介 (経4) 「日本における公衆浴場の繁栄と衰退」

⑦斉藤宏明 (経3) 「基地依存経済からの脱却—沖縄における3K依存経済の検証—」

⑧河原井智貴 (現3) ・秋山琢 (現3) ・勝本紘伊 (現3) ・河村圭介 (商3)

「ベンチャー企業の海外展開と地域金融機関の役割—東京圏の都市型地域金融機関による大企業及びベンチャー企業のアジア進出の架け橋として—」

⑨石井魁人 (現4) ・塚崎麻衣 (商4) ・富田紘平 (現4) ・飯塚昂 (現4)